

市長の伊賀じまん

— 天守閣復興 80 年に寄せて —



私が学生の頃、東京から帰省するとき、お城（伊賀上野城）が見えてくると「ああ帰ってきたな」という実感が湧き上がってきました。このように、伊賀上野城は私にとっても、おそらく皆さんにとっても、自分の世界の一部になっているのではないのでしょうか。

伊賀上野城は、1585（天正 13）年に領主となった筒井定次によって建設されました。筒井定次の天守閣は、現在の上野公園内の水源池にありました。そのそばに「筒井天守跡」の石碑が残されています。

その後、新たに領主となった藤堂高虎は、それまでの城の西側に天守閣を建設しようとしたのですが、1612（慶長 17）年の暴風で倒壊し、以来、1935（昭和 10）年に政治家の川崎克氏が、私財を投じて天守閣を再建するまでの間は天守台だけが残されていました。



▲伊賀上野城。白鳳城の名でも呼ばれています。

地域のシンボルともいえる天守閣が再建されていなければ

▶(写真上・下)「鳳凰雙飛橋畔絶景図屏風」川崎克堂(克氏の雅号)筆。伊賀上野城と服部川堤にあった兵服の松が見事に描かれています。(伊山文庫所蔵)



ば、現在の観光のあり方や人々の郷土への思いも違っていたのではないかと、そのありがたさをしみじみ感じるところです。

また、城づくり、まちづくりの名手と言われた藤堂高虎が城を拡張した当時、丸之内と本町通りの間には外堀が巡り、広い範囲が「城内」でした。城から外堀までは南に向かって傾斜があり、大雨の際などは流れ込んだ水が最後に外堀に落ちる、いわば今でいう調整池の役割を果たしていました。また、城と城下町をつなぐ城門として東西に置かれた大手門のうち、西大手門は 1907（明治 40）年まで残され、その後だんじりの部材として使用されたということです。もし残っていれば、大阪城と並ぶ日本最大級の大手門だったようです。

現在もまちなかのあちらこちらで堀の名残を残す池や武家屋敷など、江戸時代の面影を見出すことができます。地図を手に探検してみるのもまた興味深いのではないのでしょうか。（伊賀市長 岡本 栄）

海軍航空隊伊賀上野飛行場

市史編さんだより (38)

先の大戦から 70 年を経て、戦争の記憶や記録も失われようとしています。今回は、戦時中につくられた軍事施設を紹介いたします。

現在の緑ヶ丘本町・中町、西明寺周辺に海軍航空隊の飛行場がありました。飛行場には、滑走路や兵舎、誘導路など、さまざまな施設が計画、建設されました。

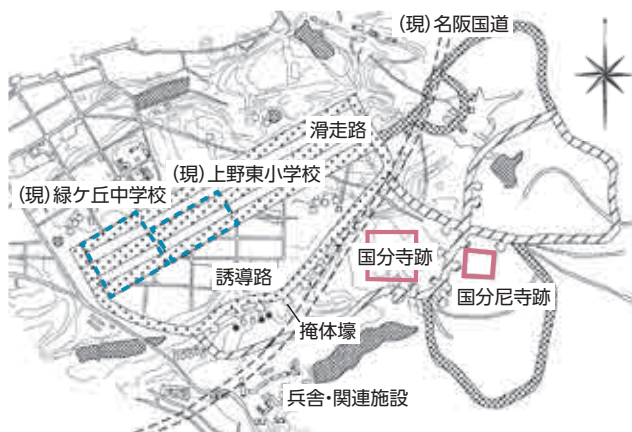
飛行場の建設は、昭和 18 年（1943）2 月頃から始まり、3 月 21 日頃から滑走路の測量を開始、10 月からは掩体壕（飛行機を爆撃から守る施設）や貯蔵施設の掘削作業が行われました。翌年 12 月頃からは、住民の勤労奉仕により飛行場の整地作業が行われました。

昭和 20 年（1945）5 月に滑走路が使用できるようになると、第 1001 海軍航空隊が着任し、飛行兵・整備兵など 1,000 人余りが伊賀上野城や集議所などを宿舎とするようになり、また、民家へ下宿する兵士もいたようです。

同じ頃、航空隊が属する司令部が伊賀上野城に移転してきました。城の天守閣最上階には機銃が据えられ、敵の飛行機の襲来に備えたとい

います。飛行場の跡地は、現在緑ヶ丘中学

校や上野東小学校、工場、宅地となっており、当時と大きく変わっていますが、掩体壕の一部が伊賀国分寺跡に残っており、かつての様子を垣間見ることが出来ます。



▶終戦直後の海軍航空隊伊賀上野飛行場平面図(田畑孝一著「伊賀の軍事施設と戦災」掲載図を一部改変)

	完成した飛行場
	工事中
	計画
	二〇機銃陣地完成
	二〇機銃陣地計画
	池

総務課市史編さん係
TEL 52・4380
FAX 52・4381